

□ 花葉会賞受賞者紹介

北九州エリアの唯一の鉢物専門市場の発展に貢献する

九州日観植物株式会社 社長 西川 勲 氏

経歴

昭和19年3月 福岡県生まれ
昭和36年3月 福岡県立福岡農業高等学校卒業
昭和38年3月 千葉大学園芸学部農業別科修了
昭和39年4月 日本観葉植物株式会社入社。造園部に勤務



勲氏の生家(実父勇氏)は、野菜苗、花苗などの生産を行う園芸業で、本人は、将来九州に戻って造園業を起こすことを志望していたが、上司である斎藤洋氏(昭和9年千葉高等園芸学校卒、当時東京支配人、常務取締役)から、将来の発展性を見越して

九州地区での鉢物専門市場の開設を強く勧められた。氏はこれを受けて帰郷、家族会議の招集などを経て、市場開設の同意を得た。

昭和40年10月 筑紫野市岡田の地に九州日観植物取引場開設準備室を開設。

昭和43年6月14日 九州日観植物取引場初市。勲氏時に24歳であった。独創性に富む氏は様々な企画を展開して業績の拡大に努めた。年次に従い列挙すると、次のようになる。

昭和43年 鉢物の「九州産地化」を目指して、愛知、静岡、岐阜方面の優良農家に依頼して、農業従事者を鉢物生産者に育成すべく研修生として送り込んだ。かくして地域農業の振興を計った。

昭和46年以降、市場業務に率先してコンピューターを導入し、常時システムの向上を目指した。

また、鉢物、苗物の流通容器(フラコン、トレー、ダンボール)の規格化の推進を、全国の生産地、同業花き市場へ向けて呼びかけ続けた。

昭和57年 花き卸売市場における市場買い上げ代金決済の仕組みは、従来から



市場鳥瞰写真

不統一、緩慢な傾向に置かれていたが、買出人に向けて積極的にアプローチして「代金一週間システム」を構築し、徹底をはかった。

平成9年 農林水産省の「卸売市場高度化補助事業」に参画し、市場内にローラー指導搬送システム(ローラー延長35キロメートル)を施設し、商品の入荷・出荷の省力化に努めたが、このシステムは全国的に類例が無く、高い評価を得ている。

平成15年 すでに施設したローラーシステムに、新たに電光掲示板による機械競りシステムを導入し、両システムをコラボレートして市場の入荷・出荷業務の無人化を確立し、現在に至っている。

平成21年 新たな課題として、COMPLEX CENTER(複合施設)構想の実現に着手した。

(文責: 谷口勇<元(株)フラワーオークションジャパン代表取締役社長>)



ローラーシステム

□ 花葉会賞受賞者紹介

人と時代に恵まれた半生

篠田 朗彦

経歴

昭和14年 神奈川県茅ヶ崎に生れる
昭和33年 県立湘南高校卒業 千葉大学入学（造園学科）
昭和37年 千葉大学卒業 神奈川県立大船植物園勤務
その後 県庁農業技術課 園芸試験場相模原分場長 三浦試験場長等を歴任
平成12年 大船植物園長を最後に県を定年退職
平成12年～20年 全農神奈川県本部技術顧問
平成13年～現在 日本ガーデンデザイン専門学校講師
平成18年～現在 英国王立園芸協会日本支部理事

著書・論文 庭木の作り方(池田書店 共S45)、最新園芸大辞典(誠文堂新光社 共S46)、アーバンガーデニング(講談社 共H14)、神奈川県の実存・潜在自然植生(県 共S47・56)、ヨーロッパに於ける広域緑化の技術手法(S50 県) 等

その他 神奈川県職員海外派遣研修(西ドイツ 2ヶ月間 テーマ・都市緑地の保存と再生48) 日本植物園協会業績賞(H8)



誰に強いられるでもなくそれなりに過ぎて来た過去に、今回花葉会からお褒めをいただけるという。あらためて今までを振り返る。何か人様に良いことをしたんだろうかと、相変わらず最後まで借りのある人生ではなかろうか。この道を目指にするようになって半世紀弱、一言で言えば人と時代に恵まれた半生だったと思う。

人

百姓の小せがれとして幼年期を過ぎた頃は、遊びは自然の中にあった。大学受験する頃、急激な都市化にみまわれ、田畑を失う代わりに大学への進学切符を手に入れた。全国区の受験校であった出身高校に変わった先生がいた。その先生の授業を受けると大学受験は生物では絶対駄目だと云われていた。梨の菊池教授に憧れて鳥取農専に行かれた地元の大地主の息子であ

った。その先生に相談すると松戸は生白くてだめだいわれた。農つまり食糧生産がこの道の原点であると説かれた。私はその泥臭さより少しのナウさを期待して松戸を選んだ。地に着いた学問をしるよとの、先生の教えであったと思う。

大学では、一般教養で我が国生態学の先駆者沼田眞先生(後に植物生態学会会長)がおられた。当時沼田理論は世界に通じると云うことで、少壮の先生の講座は教養・専門に限らず全部潜り込んだ。数字の羅列は理解できなくても、学問をするこの真摯な態度に感銘を受けた。

松戸に来ると植物の野外実習の指導で国立科学博物館の奥山春季先生がおられた。奥山先生にはちょうど手がけておられた日本で最初の原色野外植物図鑑の撮影にお誘いを受けるなど、個人的にも可愛がっていた。野生植物に対する興味を向けていただいた。

進路を決めるのが、ちょうど大船植物園の建設時と重なり、この道を希望した。大船植物園には大先輩の清水基夫さんが園長としておられ、お前がそんなに希望するならば、待遇は悪くなくてもよければ推薦はしてやろうと云うことで、結果的に植物園にもぐりこんだ。

昭和30年代後半は花や緑がようやく生活環境を豊かにする材料として観られるようになってきた。出来たばかりの大船植物園も住民に親しまれ毎年入園者数が増加していった。

ここで“花”や“緑”は人間にとって綺麗さを提供するだけのものなのだろうかと云う疑問が起きてきた。自分の生き様として植物を扱うことの必然性が欲しかった。

ちょうどその頃ドイツから植物社会学が導入され、緑化や自然保護に学問的根拠に基づく提案が積極的にされ、私はそれに飛びついた。その牽引車の役割をしていた横浜国大宮脇昭教授の門を叩き、代休を利用して、週一度聴講生として宮脇先生の授業を聞き、その後研究室で最終電車まで学生や研究生などと過すことが続いた。

植物を景観や美としてでなく、必然性のある生きる仲間としての見方は私にとって新鮮であった。

同じ頃鎌倉在住の植物学者・初山泰一先生にも定期

的に野外に連れていってもらい、野生植物に対する観察眼を養うトレーニングが続いた。

昭和30年半ばからあったのではないかと思うが、清水基夫さんなどが中心になって月一度 東京・青山で「花の懇話会」が開かれた。花や植物に関する農家・流通関係者や研究者などが幅広く集まり、情報交換とその道の第一人者の講演を聞く機会があり、よく参加した。黎明期の先達の話はすごい刺激になり、集まった若いメンバーのなかから数多くの著名な専門家が生まれていった。

時代

大船植物園に入った昭和37年はオリンピックブームでようやく花や樹木が住民の身近なものとして取り上げられ、各地に公園や植物園等の緑地施設が設けられるようになり、また列島改造と云うことで高速道路網などが

整備され、膨大な自然破壊の代償として所謂緑化ブームが起り、新しい緑化素材を求めた時代であった。

大船植物園でも、自治体では珍しく外国の機関と種子の交換を行い新しい観賞植物の素材を導入する事業を行った。

当初大船植物園では園芸植物に限らず植物全般の収集に力を入れていた。植物園として保存数が多いのが一つの尺度になっていた時代である。

役所の財政が厳しくなってくると、組織が自分を売り込まなければいけなくなり、民間の協力関係の中で、組織が運営されるようになった。

園長在籍中はそんな時代の替わり目であった。「園長の花散歩」と称して定期的に入園者を自ら案内したり、フラワーセンターフェスティバルと称してアマチュア団体や地元の方々と共同で祭り事を企画した。

(左ページ上に続く)

□ 花葉会賞受賞者紹介

花と人とのかかわりの視点から花育の理念に提言

今西弘子

経歴

1963年 千葉大学園芸学部卒

1965年 京都大学大学院農学研究科(花卉園芸学専攻)修士課程修了

1977～89年 大阪府立大学総合科学部にて心理学関係の単位取得、花卉園芸学と心理学の学際、境界領域の研究に着手

1991年 「花と人とのかかわりに関する調査研究」により京都大学農学博士の学位取得。その後消費者の心理的側面からの「花の消費動向調査」等も手がける

2007年～ 花育理念の作成等にかかわる

帝塚山学院大学非常勤講師、法政大学兼任講師、東京農業大学研究員、大阪テクノ・ホルティ園芸専門学校客員教授等を経て、現在東京テクノ・ホルティ園芸専門学校、日本ガーデンデザイン専門学校、JFTD学園日本フラワーカレッジ講師。花と人のかかわりの視点から「花の文化史」、「フラワービジネス」等を講義。

著書「花と人間の新しい関係を求めて」(農文協)、「農業技術体系花卉編」(農文協・共著)、花の名随筆シリーズ「十二月の花」(作品社・共著)他

穂坂八郎先生に卒論指導を受けた最後の学生で、実際に指導していただいたのは当時助手でおられた横井政人先生でした。千葉では開花と温度、京都では開花と日長が卒論・修論のテーマでした。ただ今ふと思いつくのは、その間花を実験の対象としか見ることができなくなっていることに不安を感じていたのか、実験や卒論・修論とはまったく関係のない花の文化史関連の書物を買集めたり、読んだりしていたことです。

欲がないというか、やる気がないというか、卒業してしばらく当時新しかったフラワーデザインをかじったりした後、あっさりと専業主婦となりました。下の子が4月には小学校に上がるという、およそ30年余り前の早春、家族旅行の列車の通路に落ちていた新聞の切れ端に目を止めたことが小さな始まりだったのでしょうか。そこには「アメリカでは社会人がふたたび大学に・・・」という記事があり、帰宅後早速近くの大阪府大に聴講の申込みに行っていました。リカレントの走りです。

(左ページ中に続く)

感謝

私はいい時代を過したと思う。

未だ戦争の影を背負った少年時代から、貧しくても前向きに何かを求める対象があった青年期に育ち、その時々に出会った先達に教えと刺激を受け、少しずつ自分の将来を定めていったのである。

大船植物園には神奈川県38年間在職中29年間いた。途中5回転職があり、行儀見習いや組織改変の手伝いをさせられたが、次の移動では必ず大船植物園に帰ると言う役所では珍しい人事の経験をした。あいつは他では勤まらなると言うことか、当人にとってはありがたいことだった。

県退職後は全農神奈川(旧県経済連)で緑化部門の立ち上げに参画し、県内植木生産者の育成に協力し、専門学校講師として“緑”の本質を後進に訴え、また、

RHSJでは、機関紙の編集のお手伝いを通して、園芸や“緑”の分野の行く方向を考えている。

今まで述べて来たように自分が師として慕ってきた方々は、なんぼ追っかけても絶対に適わないものを持った方々だった。20歳代では、今はこの先達から沢山の借金をしよう。それは30歳代になって返そう。だから甘えてもいいんだと。

それが30歳代になっても40歳を過ぎても借り続け、そのままになってしまってお返しのできなくなった方々もおられる。何時までも借りっ放しの人生である。

自分の居場所はどこなだろうと考えてみた。あるとすれば植物を生きものそのものとして観て、その視点から人々と過してきたのではなからうか。自分の考えている事ややってきた事はメジャーな分野ではないが、常にその時代と共にいたように思っている。

とくに目的があるわけでもないの、とりあえず千葉大在学中の怠慢が原因で不足していた理科教職取得に必要な2つの科目を聴講しました。園芸とはまったく違う理科教育法の心理学的内容に興味をおぼえ、その後結果的に12年間家事の傍ら毎年1~3科目の心理学関連の科目を聴講し、心理学関係の先生方の講義やお話しを聴く機会に恵まれました。その中で花は人の心理と深い関係にあることに気付き、心理学の統計的手法をそのまま使ったり、結果の出しやすいかたちに変えたりして花と人との関係を数値化するためのアンケート調査、解析等の試みをはじめました。幸いなことに当時スーパーコンピューターがようやく大学で使えるようになったばかりの頃で、かなり膨大な調査結果を処理することが出来ました。来る日も来る日もアンケート結果のデータ打ち込みを続け、少しずつ有意な結果が得られるようになっていきました。関西心理学会、園芸学会等で発表をする内にこのような境界領域的な調査が珍しかったのか、新聞や雑誌等に紹介されたりするようになりました。

一主婦の単なる思いつきのような調査や研究を認めていただけたのはやはり千葉や京都で教えを受けたことが大きかったのではないかと思います。学位論文のテーマは「花と人とのかかわりに関する調査研究」でしたが、しだいに「消費者は花に何を求めているのか」というような調査や講演の依頼が行政や生産者、市場、

小売業者の団体等から入るようになりなりました。一方園芸専門学校や大学では主に花と人とのかかわりからみた花の文化史、花の消費の講義をすることが求められ、その準備のために花の文化史の資料に目を通すこと、関連する世界史、日本史、経済等の勉強をやり直すことの必要に迫られましたが、結果的にはそれが以後の調査や研究を深めるのにプラスになったと思います。

この仕事を始めてから20年以上がたち、私なりの「花と人とのかかわり」のかたちが見えてきたと感じていた一昨年、思いもかけず花育推進検討委員会の委員長に指名され「花育の理念」を作成することになりました。委員会は農水、文科、花普及センターの方々、フラワーデザイナー、教育関係者、花や資材の取り扱い業者の方々等10人余りで構成されており、様々なご意見を取り入れてかたちを変えた部分もありましたが、期待以上に私の提言が活かされ、これまで積み上げてきたことが少しは役に立ったのかと感じました。

生来人前に出て話をする等ということのはもっとも不得意で自分には向いていないと考えていましたが、このような仕事をするようになったことに不思議さを感じます。人生の後半近く始めたことでほんのわずかでも社会的貢献らしいことができたことすれば身に余る喜びです。これもアンケートにお答え下さった何千人ものの方々、大学の先生、先輩や後輩等多くの方々の様々なかたちでのお力添えに依るものと感謝しております。